

神奈川大学横浜キャンパスのCALL教室について —現状、そして未来に向けて—

言語研究センター所長 岩畑 貴弘

神奈川大学横浜キャンパスの最も奥まったところに20号館があり、そのさらに3階に「言語研究センター」はある。そんな奥まったところであれば、さぞかしのんびりゆったりとした時が流れているだろう、という大方の予想を裏切り、大きくふたつの柱を持つ業務に追われ、言語研究センターは大変忙しい場所である。柱のひとつは、研究所として所員の言語に関わる研究をサポートすること、そしてもうひとつは本学の学生の語学学習のサポートをすることである。学生の語学学習サポートのため、いつでも好きな時に海外の映画やドラマなどを見て外国語や異文化の学習ができる「語学視聴覚室」があり10のブースがある。また、センター事務室の向かいにはスタジオとビデオ編集室があり、これは研究用途にもそして教育用途にも使用される。また、研究サポート用に比較的大きな書庫もセンターにはある。

これだけでも十分に大所帯と言えるが、神奈川大学の言語研究センターの大きな役割に「CALL教室の運用」がある。それは大学が定めた「言語研究センター規程」の第3条(6)にもはっきり記載されているとおりでである。

CALLとは Computer-Assisted Language Learning の略で、いわゆるLL教室のLL機器をコンピュータ化したようなものである。つまりLLの機能を、PCにインストールされた複雑なソフトで制御し、教員用PCと各学生用PCがLL端末として機能させるものであり、それによって通常のLL教室や通常のPC教室とは全く異なる、高度な語学学習が可能となる。例えば、席が離れたところでの動画付きの会話練習はもちろんのこと、モデルとなる音声ファイルやビデオファイルをPC上で自在に操りながら、自らの声を合わせて録音しながら繰り返し練習したりできる。



語学視聴覚室 視聴風景



20-319教室

もちろん教員はそうやって録音した音声ファイルを個別に聞いて指導したり、あるいはよくできた学生のもを他の学生たちに聞かせて練習させるなども可能である。外国語学部生はじめ、語学を真剣にマスターしたい学生には必須の設備となっており、学生の評価も高い。

センターと同じフロアの20号館3階にはそのCALL教室が実に10教室並んでいる。いくら神奈川大学の外国語学部が1学年定員450人の大所帯とはいえ、10教室は相当な数で、これほど多くのCALL教室が並んでいる大学もそう多くはない。私の任期中だけで東京や神奈川のいくつかの大学に見学に行ったが、有名な大学でもこれほどの数のCALL教室にはついぞお目にかかったことはない。

しかし、神奈川大学のCALL教室の真に素晴らしいところは設備が整っていることでなく、その稼働率が非常に高いことである。以下の表をみていただきたい。

2017年度後期CALL教室稼働率(1-4限)

	開講授業数	稼働率
月	24	60%
火	36	90%
水	18	45%
木	29	73%
金	29	73%
合計	136	68%

年度や学期によって多少の変動はあるが、70%程度の高い稼働率を誇っている。1限も含めての数字であるため、実際10教室がすべて埋まる時間帯も2017年度後期では火曜日3限、木曜日2限、金曜日3限の3コマも存在する。私もCALL教室を1コマ使わせていただいているが、CALL教室を使うのは鍵を借りたり機器をスタートしたり、最後は機器の電源を落としたり鍵をかけたりと面倒が多い。もちろん、機器の操作が難しいことは言うまでもない。PCの操作ができる人でもCALL

機器の操作を一通り理解するのは一苦勞である。そんな、言ってみればハードルの高いCALL機器を使って授業にまい進してくださる先生方がこんなにも多いのは大いに驚かされる。私が所長を務める前からずっとこの稼働率らしいが、機器を使って一生懸命授業を展開される先生方にも、またそういった先生方に絶え間なく働きかけてCALL教室の稼働率をここまで上げてこられたセンターに脱帽するしかない。

さて10教室もあると老朽化に伴う機器更新もまた一苦勞である。サーバー、教員用ならびに学生用のPCを中心としたシステムであるため、PC自体の寿命並びにメーカーの部品保有年数、あるいは使用OSのセキュリティ対策上の問題で、本当は5-6年で機器更新するのが理想的である。が、決して安価ではないシステムであること、またセンターでは普段のメンテナンスにも力を入れて大切にシステムを使用していることから、耐用年数を7年としている。そして7年が経過する時に機器更新するのだが、基本的には二教室をペアにして更新している。そしてここ最近では文科省の補助金（ICT活用推進事業）を運営委員ならびに事務局一丸となって獲得し、整備にこぎつけている。

入れ替えに際しては、業者から相見積もりを取得し、もっともよい提案をしてくれた業者とともに作り上げるわけだが、当然センターでもより良い次世代のCALL教室をつくるべく、他大学のCALL教室の見学を行っている。2015年度には慶応大学日吉キャンパス、2016年度には専修大学生田キャンパス、そして今年度には東京大学駒場キャンパスならびに東京海洋大学品川キャンパス、そして別の機会に神田外語大学を見学させていただいた。タブレットを使用して授業を行う大学もあったが、それはまだ開発段階で使用できる機能も通常のPCを使用したシステムよりずっと簡素化されていた。



慶応義塾大学日吉キャンパス
外国語教育研究センター CALL 教室

さて、現在横浜キャンパスではHPでも発表されているとおり、みなとみらい地区に新キャンパスを開設する準備をしている。そこに新学部含め神奈川大学の国際系学部を集約する予定である。そうなれば当然そこでは語学教育が大きな柱のひとつとなる。センターのアピール不足のせいで学内でも誤解をお持ちの方が多く、言語研究センターは教育の中身そのものには一切かかわっていない。教育内容を決定し、教育を行うのは当該科目が専門科目であれば各学部そして当該科目が共通教養科目であれば外国語教育部会である。センターはあくまで CALL システムを備えた教室を運用しているだけであり、教育内容にかかわることを検討することもなければ、その会議に参加することもない。そういった役割を十分認識したうえではあるが、現状の横浜キャンパスにおける CALL 教室の数と高い稼働率を見たときに、みなとみらいキャンパスにおいても、やはり CALL 機能を備えた教室（それはもちろん CALL 教室というより、多目的教室でも全く問題ない）が必要であることは明らかに思われる。

それを当初より考え、センターではみなとみらいキャンパスが具体化してくるかなり早い段階から要望書という形で大学上層部に CALL 機能の実装の提案をしてきた。2017年3月、7月そして11月である。直近の11月のは、外国語学部そして外国語教育部会と話し合い、連名で要望書を提出した。上述の通り、教育内容をうんぬんする



東京大学駒場キャンパス
駒場アクティブラーニングスタジオ (KALS)

立場ではセンターはないので、あくまでサポート的にである。

現在まで、なんら公式の返事はないため、どうなっているか当センターからはよくわからないが、時折、CALL 教室・設備をめぐる意見・疑問は漏れ伝わってくる。伝わってくるだけで、それにセンターとして返事をする機会がないため、この場を借りて説明させていただく。

まずよくあるのは、備え付けのデスクトップ PC やノート PC を用いるより、タブレットを用いた CALL システムを使えば学生の使い勝手もよく、また費用も抑えられるのではないかというご意見である。将来的にはそういう方向性もあるが、現状ではタブレットを用いたシステムはまだまだ開発途中の段階である。またタブレットに必須の無線通信は、通信の安定性が大きなネックとなり、現段階では不可能と言える。

CALL 教室を整備するには多額の費用がかかるが、その費用をかけるよりネイティブスピーカーに授業をお願いしたほうがよいのではないかというご意見も耳にする。専門科目ならびに外国語科目両方においてネイティブスピーカーによる授業はすでに行われており、さらに増やす必要性については賛否両論であろう。また、費用に関してだが、CALL 教室使用の大半を占める英語においてネイティブスピーカーを大量に雇うのは予算が相当かかり、7年使用できる CALL 機器を整備するより高くなってしまふ。

大学が教室内に一齐にPCを準備するのではなく、学生が自分のPC等の機器を持ちこんで（いわゆる「Bring Your Own Device」）それを使ってCallの授業を行うべきではないかというご意見も聞く。単に情報教室・PC教室としての使用ならばBYODも可能かと思われるが、語学習得を目的としたCALLシステムはサーバ設置とサーバソフトそしてクライアントソフトが複雑に絡み合ったシステムであり、現時点ではBYODは残念ながら不可能である。

新キャンパスではどの程度のCALLを必要とする科目が開講されるのかという疑問もいただく。もちろんそれは定かでないが、現在のCALL教室の使用頻度から推定は可能である。現在の使用数は（数字は2016年度の前後期平均）、英語英文学科専門科目は47コマ、スペイン語学科専門科目は2コマ、中国語学科専門科目は10コマ、国際文化交流学科専門科目は9コマ、外国語科目（英語）は60コマ、外国語科目（その他の外国語）は14コマ、の合計142コマがCALL教室で行われた。そのほか、他学部のものもいくつかある。新キャンパスには、外国語学部英語英文学科・スペイン語学科・中国語学科が移転、その他、国際文化交流学科をその一翼とする新学部が定員を増やして移転する。センターのシミュレーションによると、それだけでも108コマはCALL教室を必要とする。数が現在の横浜キャンパスより少ないのは、外国語学部以外の学生を対象にした授業も現在CALL教室で行われているためである。これだけで7-8程度の教室が必要だが、これに経営学部がさらに加わるため、やはり最低8教室は必要である。

予算がいくぐらい必要なのかという疑問もいただく。3年後のことは確たることはもちろん言えないが、現在言語研究センターでは2018年度末にふたつのCALL教室の機器更新を目指し学内予算を申請中である。そこでは、これまでよりも

ずっと使いやすいようにノートPCを使用したCALLシステムを提案している。またアクティブラーニング室としても使用可能なように、机は可動式とし、ノートPCは机に収納可能にしている。また電子黒板も備えている。それでも節約に励み、機能の絞込みをして、これまでにかかっていた費用の2/3、すなわち1教室2000万円以内に抑えることが可能となった。もちろん、上述のように3年後までにタブレットを使用したり、無線LANを使用したシステムが確立されればもう少し安価になると思われる。なお、当然のことではあるが、同様にセンターのシミュレーションでは、外国語学部が新キャンパスに移転するまでの2020年度末までは現在の10教室体制を維持する必要がある。しかし、2021年度からは4教室程度で十分となるので、長い目で見ればその6教室減の予算を新キャンパスの8教室のCALL機器整備に回せば、新キャンパス開学後もこれまでより大幅に整備・維持予算が必要ということはない。

以上、私がセンター所長になってから行ってきたセンター関連業務のうち、かなり多くの割合を占めてきた「CALL教室の運用そして整備」について積み重ねてきたものをこの機会にまとめとして書かせていただいた。今後の運用そして整備のための資料として何らかお役に立つことを期待する。もちろん、これから皆様のご理解をいただきながら、言語研究センターとして学生の学修に役に立つよう尽力していく所存であり、ご理解・ご協力を賜れば幸いである。



みなとみらいキャンパス 完成イメージ図